

レファレンス
余 話

音楽資料室に回ってくるレファレンスの中に、「日本の古い流行歌の歌詞を知りたい。」というものが時々ある。この種のレファレンスには、『日本流行歌史（戦前・戦後編）』（社会思想社 1981刊）、『歌暦五十年』（全音楽譜出版社 1954刊）、『日本流行歌年表』（彩工社 1968刊）、『日本の歌唱付録総索引（レコードの付録）』（中央公論社 1972刊）等がまず役立つ。これらのように、曲名索引、歌い出し索引のついているものが便利である。これらの資料で容易に探し出せない場合は、今まで別々のジャンルのディスク整理にあたったスタッフが、総出動することになる。

つい先日、「添田啞蟬坊の^{あせんぼう}「新不如帰^{・ほととぎす}」の歌詞のほとんどは分かっているので残りを知りたい。」というレファレンスがあった。添田啞蟬坊といえは、明治・大正期の演歌師であるが、そのころは、現在のようにレコードで歌曲の流行をみる時代ではなく、すべて演歌師によって歌が世間に伝えられた。演歌師というのは、読売壮士などもいわれ、政治運動のひとつの現われであった。明治15年ころから、わが国に自由民権の思想が広まる一方、政府の干渉が激しくなってきたため、言論のはげ口を歌に求め、自分の主義主張とか、社会諷刺を作詞して、節をつけ、街かどでそれを歌い、印刷本を売って思想の宣伝につとめた。中にはそれを商売にする者なども加わり、壮士節といわれたころの潑刺さは失われる。また、改作

が多いことも災して次第に飽きられ、演歌師は逆境に陥り、四散してしまう。ただ、添田啞蟬坊のみが、演歌の孤塁を守っていた。一時衰退した演歌も、明治39年、彼が「のむき山人」の名で出した「ラップ節」が大流行をみるところから息を吹きかえし、大正末に現代風の流行歌がレコードで大衆の間に普及されるようになるまで、しばらくの間大衆を魅惑したのである。

さて、その添田啞蟬坊の「新不如帰」であるが、「金色夜叉」と「不如帰」は明治時代の大衆小説の双璧で、知らぬ人もあるまい。共に幾たびか芝居に上演され、歌もそれにつれて広く歌われた。「不如帰」の歌は、「緑もぞ濃き柏葉の」一高東寮寮歌の曲を借りて歌われたものらしい。さらに、当時は替歌が多く、「不如帰」の浪子と武男はマリつき唄にまで歌われていることが分かった。しかし「新不如帰」となると容易に分からないのである。

そこで、先にあげたレファレンスブック付載の「曲名索引」で調べてみると、竹石夢村の作詞であることが判明したのであるが、ほしい部分は中略となっているのでやはり分からない。明治・大正期の関連資料にあたってみるが分からない。結局、完全な大正期刊行物の目録が存在しない現段階では、これ以上の調査は難しいということになった。この調査の過程で明らかになった「新不如帰」の作詞家が、実は、添田啞蟬坊その人ではなく、竹石夢村（『歌暦五十年』による）である、という発見は、このレファレンス直接の課題ではないが、副産物として、私には興味深いことであった。

（人文課 村田はるみ）